

平成19年度文学研究科修士論文要旨

禅語にみられる「自然」に関する考察

文学研究科宗教学仏教学専攻 禅学禅思想史研究(Ⅰ)専修 伊藤秀真

「禅」の立場から「自然観」をテーマとして問題を提起した。その研究方法として、はじめに禅宗の系譜を明らかにしている『景德伝燈録』全三十巻より自然を表す語句を抜き出して検討することにより、用いられ方の特徴が、明らかになるのではないかと考えた。禅者の語録や詩では、度々巧みに自然を表す語句を用いている。そもそも中国禅の立場での「自然」とは、どのような意味を持つものなのであろうか。自然を表す語句を通して、禅の本質も明らかにしようと考えた。

禅宗には、「触目菩提」や「遍界不曾蔵」、あるいは「無情說法」などと称して、我々の眼前に展開する自然界の営みを、全て真理の現われとして捉えるものの方が存している。自然の全てが仏性であり、覚性そのものであるとする見方も出来るのである。

「触目菩提」は、『雲門広録』にあり、仏性は遍在しており、目にするもの全てが菩提（本来の姿）であることを説いた言葉である。これは『莊子』の「目撃道存」と同じ意味である。

「遍界不曾蔵」とは、遍界は遍法界、つまり全世界を意味し、何者をも包みかくすことなく、真実はいたるところにありのままの姿で顕現しているということである。これを自然と照らし合わせると、一切万象がそのまま本来の面目の現れであるといえる。目に見える空間（情景）そのものが真理であると窺えた。

「無情說法」については、『宛陵録』にみられる「山是山水是水」を引き、禅の論理・靈性的自覚の論理として、鈴木大拙氏が「即非の論理」の創唱をしていることを述べた。凡夫は「山是山」というように、自然そのものの姿として捉え、智慧（般若）を得、高次にある者は「山是非山」・「山不山」と認識する。真如の立場からみれば、山は仮の名である。これを踏まえて、本来自性底としての「山是山」という段階に至るのである。それゆえ、凡夫と同じ「山是山」であるが、本質を異にするのである。このようにして「無情說法」を検証すると、「山是山」は、現われている自然そのものを示しているのではなく、自己の境界によって捉え方が異なることが分かる。人間が生活する環境、そこで目にしているものが本来の面目で

あり、何か特別な場所（境地）に存在するのではない。

禅語録には、具体的に自然を表す語句が見られ、語句の本質も考えてみた。六祖慧能の遺偈の一句に、「葉落帰根」の語がある。枝葉が落ちて根元に帰ること。転じて、遷化する意である。枝葉が大地より萌え出て開花開葉し、また大地に帰りゆくさまは慧能の一生を喩えている。草木繁茂するさまには、根は地中であって外に見えないが、繁茂のエネルギーがここから出ることも意味している。それは、葉が根に落ちて栄養となり、新しい芽を出す力となる循環の理を表している。達磨の伝法偈に「一華開五葉、結果自然成」がある。自然のこうしたサイクルを、この句は見事に展開させている。また、「草木成仏」として、本来の面目を捉えることがある。草木はやがて枯れ落ち、また植物が茂るさまは、脈々と法が継承されていることでもある。『絶観論』の「依草附木」の語句については、禅ではなくアニミズム思想に通じている。「草木成仏説」については、『大乘玄論』を中心に、多くの学者が研究をしている。

自然という概念には「人間」も含まれており、自然の一部である。このことから検討しなくてはならない。『正法眼蔵』「身心学道」では、百丈懐海の語録を挙げているが、そこには「自然見」「自然外道」の語句がみられる。「自然見」とは、自然は無因のことで、すべてを無因とみる見方、つまり、因果を否定する考えをいう。また「自然外道」も、人は靈妙なる自性を具有しているから、修行をしなくても、いつか悟りに到達するという思想である。同じような思想に仏性思想があるが、自己の内に仏性のもとより具わっているかについては、今後検討すべき課題である。仏教の因果を否定し、先人の機縁に因って悟入したと錯覚してしまうのは、己がまま禅を行じ、邪心をもって真如を見ているが故である。自然は何も語らなくても、我々の心意識がそこに映しだされ、真実事の禅では通用しないのである。

禅を自然の面から考えてみたが、禅者のそれぞれの境界が関わってくることにより様々とはいかない。禅者の掴む世界に依り、異なって見えるからである。

道元と親鸞

文学研究科宗教学仏教学専攻 禅学禅思想史研究(Ⅱ)専修 鷺見和典

宗教の本質とは「祈り」であり、「祈り」による「救い」を目的としている。仏教はゴータマ・ブッダが自己の救済を目的として始まった宗教である。仏教においては、自らのみの「救い」だけで完結していれば、誰もゴータマ・ブッダという人格や教えについて知ることはできなかつたであろう。ゴータマ・ブッダが仏教という教えを説き始めた事が、自己の救済は利他行にあると、言い換えることができる。つまり、仏教においては「祈り」の根源は利他行であり、その結果「救い」が存在することとなる。

インドにおいて起こった仏教は各々の土地の文化を吸収し、「祈り」の形態を変化させながら伝播し、日本へと伝わった。日本において仏教が最も隆盛を極めたのは鎌倉時代であるとされている。法然・親鸞・道元・日蓮と多くの僧侶が活躍した時代であった。本稿では、道元と親鸞という鎌倉仏教においても対極に位置する2人の「祈り」と「救い」について考察し、日本仏教の変容の一部を知ることが目的とした。その際の手がかりとして、道元と親鸞の書物を中心に、「祈り」という行為によって救われる対象についても考察した。

宗教の本質が「祈り」であるとすると、「信」が最も重要であると考えた。道元と親鸞の主著において、「信」の文字を使用しているものを取り上げて考察した。道元においては『正法眼蔵』の見仏の巻を中心に、親鸞においては法然の専修念仏の思想と『歎異抄』『教行信証』を比較した。道元の坐禅は「修」（修行としての坐禅）と「証」（空の体感）の一等の坐禅であった。親鸞の念仏は師の法然の専修念仏を発展させた絶対他力の念仏であった。

両者は、この世における無常を感じ、道を求めた。道元は母の死を、親鸞においては母の死や家系の没落が原因であったと言われている。道元においては如浄と仏教の根源であるゴータマ・ブッダ、親鸞においては法然と阿弥陀仏を尊重し、多くの人を救い、自らも救われたい、

という思いのもと、戦乱の鎌倉時代に立ちあがった。

道元、親鸞はそんな時代背景の中、自らの救いを見出し、その救いを弘めていった。両者は全く異なる行を選択しながらも、現代の日本においては何の矛盾もなくその教えは共存している。両者の教えはゴータマ・ブッダが説いた教えの中であつたことは間違いない。仏教の原点は一切衆生の救済であり、そのスタートは自らの救いと自らの肉親への思いによって誕生したのである。

こうして捉えてみると、仏教は変化しながらも、本質は変化せず、様々な土地に定着していったことになる。ここで最も興味深い点は、恐らく日本仏教史上、類を見ない形でインドの仏教の源流に帰ろうとしたのが道元であり、仏教の本質のみを残し全てを日本的に変容させていったのが親鸞であると見ることができることである。

全く異なって見える二人の教義であるが、同じ仏教から派生したものであり、共に救いを求めるものであつた。ただ、そこに二人が選択した行が異なつた為に宗派が生じただけである。

本稿においては、両者が求めた救いについてスポットを当てて比較した。二人の行の選択に違いはあるにせよ、共通している点は、目標と一体となることであつた。道元は坐禅により体解できる「さとり」によって救われることを説いた。道元は坐禅という行により、言葉を越えた本来の自己に備わっている「証」と一体になることで救いを見出した。親鸞は念仏によって救われることを説いた。親鸞の念仏は自己を忘れて阿弥陀仏と一体になることであつた。

今後は道元と親鸞を直接比較するのではなく、両者に共通しているものにスポットを当てて研究していく。道元が解体した「さとり」とは、言葉を越え、自他の分別を越えたものであると捉える事ができ、それは空観に近いと考えられる。又、親鸞が龍樹の教えに関心をもっていたことは確かである。今後は道元と親鸞を、龍樹を通して比較することを試みたいと考えている。

三代相論の研究

文学研究科宗教学仏教学専攻 禅学禅思想史研究(Ⅱ)専修 佐藤 龍 真

道元禪師が示寂された後、曹洞宗僧団の内部で三代相論と言われる争論が起こったとされている。この争論は、永平寺三代の義介禪師と四代の義演禪師の遺弟たちが、それぞれ自分たちの師が永平寺三代であると唱え、争ったという出来事であるとされる。しかし、これは一般的な説であり、他にも諸説が存在するのである。

この三代相論と言われている争論は、義介禪師が永平寺三代として入院された文永四年(1267)から、義雲禪師が永平寺五代として入院される正和三年(1314)までの、約五十年もの長い間に起こった出来事であると考えられている。この争論は三度起こったと考えられており、それらは、第一次争論、第二次争論、第三次争論と言われている。それぞれの争論の発生時期は、第一次争論は義介禪師が永平寺三代として入院された文永四年(1267)、第二次争論は弘安三年(1280)、懷辨禪師寂後に義介禪師の再住を機として、そして第三次争論は義介・義演の両禪師寂後である。

次にそれぞれの争論の内容について見てみることにしたい。第一次争論は、義介禪師が懷辨禪師の命により、京都や鎌倉などの禅寺院を視察し、さらには、入宋して宋の禅刹を調査し、弘長二年(1262)に帰国し、文永四年に永平寺の住持となり、伽藍の整備や行事制度等の改革を進められた時である。この改革によって、義介派即ち進歩派と義演派即ち保守派といった派閥が生まれ、永平寺の宗風と僧団の運営での方針の違いが生じ、対立が深まったためである。また、義介禪師は臨濟宗の流れを汲む日本達磨宗の法を懐鑿より嗣ぎ、さらに懷辨禪師から曹洞宗の法をも嗣いでおり、このことが反義介派より疑問視され、発生した争論と言われている。結果、義介禪師は永平寺住持を退くことになる。

第二次争論は、弘安三年、懷辨禪師の寂後、義介禪師が再度永平寺に入院することになり、初住の時と同様に、僧団内部で進歩派とそれに反発する保守派との対立が起こったと言われている。しかし、この義介禪師の再住については確かな史料がないため定かではない。よって、この第二次争論の存在の有無や起因等は推測でしかないのである。

第三次争論は、義介・義演両禪師寂後に、両禪師の位

牌を祖師堂に安置するにあたり、どちらの牌に「第三代」と書くのかということが問題になり、争論が起こったとするのである。この争論で両派は、証拠などを出し主張するが、決着は着かず、鎌倉幕府に訴え、判断を求めるといふ程まで発展した。しかしながら、幕府の回答は、どちらかを第三代とするのではなく、両禪師ともに前住とするというものであった。この第三次争論の背景には、寂門派と言われる宝慶寺僧団の存在が窺い知れ、それは寂門派の伝える世代配列にある。寂門派では、義介・義演両禪師に代わり、寂門を永平寺三代に迎えているのである。この世代配列を成立させたのは建綱禪師であり、この世代配列の裏には、寂門派に何かしら意図というものを感じられる。そしてこの寂門を永平寺三代とした世代配列は寛政八年(1796)に玄透即中禪師によって改正されるまで続くのである。

曹洞宗僧団内で起こった三代相論と呼ばれている争論は、永仁元年(1291)に義介禪師が大乗寺に移るといふ出来事が起こり、一応の終結を迎えることとなる。

これまでの研究でも確固たる定説がないのが現状である。史料の乏しさもあって、僧団内部で起こった争論の発生年次、起因、内容に関して、後世に幾つもの説を生み出したといえる。三代相論と呼ばれている争論は、三度の争論をまとめて言っているという説や、三度起きた争論の一つに視点を当てて考えられているという説がある。また、小規模の争論はあったかもしれないが、三代相論という程の大きな争論は起こらなかったという説もあるのである。

このように、三代相論を考察すると、義介禪師の再住説や寂門派の行実等の諸問題等が、この三代相論の内容等を複雑にし、未だ解決を得ていないのである。結果、三代相論後の曹洞宗僧団の展開をみると、三代相論の有無に関係なく、何かしら変化が求められる時期だったのではないかと考える。時代は蒙古の襲来等で日本が揺れており、曹洞宗僧団も次の時代への僧団の在り方を模索・構築していかなければならなかった。その過程で、この三代相論と呼ばれる争論は、起きるべくして起こったのであり、三代相論ではなくとも別の問題が発生したのではないかと考える。

中国初期天台における思想と実践

文学研究科宗教学仏教学専攻 仏教学仏教史学研究(Ⅱ)専修 加藤 高敏

本論文では、「中国初期天台における思想と実践」という課題を取り上げたが、本来中国天台を研究するにはインド仏教である、『般若経』や『法華経』、龍樹の『大智度論』の思想や実践に触れなければ、それなりの理解の完成は望めないのであるが、本論文では中国天台宗第二祖である南岳慧思と第三祖である天台大師智顛の思想と実践を、それぞれの著作を参考にして研究した。

これには大学時代と大学院時代に勉強した「天台学」というものの、今一度の基礎固め、基礎確認をして、今後更なる高度な研究を進めようとする意図があったからである。

第一章では、南岳慧思の生涯と著作・思想について究明した。第一節の南岳慧思の生涯では、『南岳思大禪師立誓願文』と『統高僧伝』によって、南岳慧思の若き日の社会状況の悲惨さや悪比丘による迫害、またそれを受けての南岳慧思による激しい修練によって南岳慧思の思想や実践の大成されていく段階を、簡略ではあるが年代をおって究明した。

第二節では、第一節で見た南岳慧思の生涯を知る上で参考にすべき資料である『南岳思大禪師立誓願文』を、恵谷隆戒氏の論文、「南岳慧思の立誓願文は偽作か」を参考に、五つの疑問を取り上げた。この一節を設けたのは、『南岳思大禪師立誓願文』が本当に慧思によって著されたものであるかを確認することによって、南岳慧思の生涯の真偽も変わってくるからである。

第三節では、慧思の著作である『隨自意三昧』『諸法無諍三昧法門』について究明した。第一節では、両著作の成立順序について佐藤哲英氏の論文を参考に考察した。成立順序を考察する上で、佐藤哲英氏があげる二つの根拠である、慧思が禪観を説くにあたり、息・心・身の次第を語った箇所、慧思の如来蔵思想に関する箇所に関心を持って、両著作の成立の前後関係について究明した。第二節では慧思における如来蔵思想を、第三節では慧思における四念処観を、第四節では慧思の禪観と、両著作によって慧思の思想面、実践面の両面の考察を試みた。

第四節では、『法華経安楽行儀』によって、慧思における法華思想、また以後天台宗において展開される、一乗頓覚の教えを究明した。

第二章では、「天台大師智顛の著作と行体系」という思想面よりも、実践面を中心とした課題を取り上げた。

第一節では、天台大師の前期時代の著作であり、三種止観の一つである漸次止観の説かれる『次第禪門』について考察した。天台大師研究というと、『摩訶止観』の研究に偏ってしまい、『次第禪門』はあまり注目されて研究されてこなかった。しかし、天台止観の成立史において、前期時代の実践が後期にも受け継がれている点から、天台大師の前期時代の研究の必要性を感じ、ここに一節を設けて『次第禪門』を研究した。

第二節では、『天台小止観』について究明した。この著作は天台止観を、特に『摩訶止観』を読む上で入門書的作用を果たすものであるために、ここに一節を設けて研究した。この研究には、新田雅章氏の『天台小止観一仏教の願想法一』を参考に、十章を一章づつ自分の解釈を含めて細かく究明した。

第三節では、不定止観を説いた『六妙法門』を取り上げた。『六妙法門』には目立った研究は見当たらず、大野栄人氏・伊藤光壽氏の『天台六妙法門の研究』を参考に、元来、六妙門は、「安般守意」の六位の実践によって四禅定を実践するための方法であったものを、智顛が読み替え、大乘の実践法門とした「数息・随息・止・観・還・淨」という六門について、如何様な用いられ方をしたかを章をおって究明した。

第四節では、天台止観の集大成である、円頓止観が説かれる『摩訶止観』について考察した。『摩訶止観』十章をそれぞれ章ごとに究明し、そこで説かれる四種三昧や十境十乘観法など、天台止観の面に重点を置いて考察した。

本論は、南岳慧思の実践と思想が、どのように天台大師に受け継がれ、『次第禪門』から『摩訶止観』までを究明することによって、天台止観が成立していく過程を理解することができればという意図で究明した。

情報化社会における禅の展開

文学研究科宗教学仏教学専攻 禅学禅思想史研究(Ⅲ)専修 山田 康永

現在、情報通信はインターネットの登場によりすさまじい速度で成長している。そして、それを取り巻く世界も変化していつている。インターネットの内側の世界は、肉体や物体が存在しない、ある種精神世界のようなものといえるかもしれない。そして、その世界は徐々にではあるが確実に広がってきており、現実の社会にまで影響を与えるようになりつつある。本研究では、そのような状況の中で、禅の思想や宗教はどのように振る舞い、変化をもたらされ、そこで私たちは何をすべきなのかを考察したものである。

はじめにインターネットが誕生した際からのそれにかかわる人々の思想の変化をみて、アメリカや日本の思想の違いやその傾向を考えている。これにより、インターネットの思想の流れや今後の予測を考えられるようにしたものである。また、そのシステムについても解説をしている。

次に、現在のインターネット上での宗教の振る舞いを、特定の検索サイトを用いて調査している。特に、日本のみでなく、英語圏における各宗教の傾向の違いなどを実際に調べている。その結果、用語などの解説、他のホームページへのリンク集、そしてニュースを掲載しているサイトの三つに大分することができたのだが、「宗教」、及びキリスト教などの各宗教によってその比率などに大きく違いが見られたのである。キリスト教ならば日本語、英語ともに宗教の要旨や用語の解説をするホームページが多く、また検索した際にも結果の上位に来ていたのである。それに対し、イスラムでは、英語圏ではニュースの数が多く、特にイスラム内部のニュースを専門にしているホームページが見られた。一方、日本では解説の方が多かったのである。また、仏教については、キリスト教と同様に解説が多かったのだが、その内容がこれも日本語と英語で少々の違いが生じていたのである。英語では仏教をひとくくりにして解説をしていたのに対し、日本語のときは仏教の中でさらに宗派などに細かく分けられて解説されていたのである。こういった点は日本語圏で仏教が浸透しているために発生したことだと思われる。

そして、日本国内におけるインターネットの内外の思想の変化を考察し、そこで一般に普及する以前のインターネットの扱われ方やかつての利用目的、広く普及するようになったきっかけなどを述べている。また、ここ数年みられるようになったブログといった自分の情報を公開するようになった理由、そしてそれはインターネットの本来の目的でもある双方向性へと流れが変わってきたということも解説している。さらにその問題点についてもいくつかふれている。特に、近年よく耳にするようになった「炎上」という、ホームページの掲示板やブログのコメント欄が管理者では処理しきれなくなるほど書き込みが発生する、という状態の原因の一つでもある「サイバースケード」という現象についても解説をしている。

最後に、これからに向けて我々に何ができ、何をすべきなのかを考察している。まず、現段階でできることとその注意点、特にそれまでのメディアと全く異なるものであるが故に発生しうる事柄、先ほど出した「炎上」などを挙げ、知っておかねばならないことなどを解説している。そして、次に今できることをいくつか挙げ、情報を発信する事、その情報を必要とする人のもとに届ける方法などを考察し、現時点での必要な知識が何であるかを述べている。また、インターネット上のみ存在しているヴァーチャル宗教やヴァーチャル墓地なども紹介し、そういったものまでデジタル化されていることも話している。さらに、将来への対応においては、四国遍路を例に挙げ、インターネットが使えるようになったのにもかかわらず、現実世界の八十八ヶ所めぐりをしている事から、現実でならなければならない理由を考えている。また、信仰、及びインターネットの利用者の年齢分布を調べ、そこからインターネットの利用年齢層の変化に対する対応を導いている。また、インターネットの発達に伴い肉体ではなく精神世界の重要性が増すことが考えられる。その精神世界では宗教として非常に重要である儀式、儀礼は肉体が存在しないために希薄になってしまう。これから先、禅や宗教は精神、思想を特に広く発信することが課題となるのではないだろうかと考察する。

タイ王国における仏教の受容と展開

——統治から開発まで——

文学研究科宗教学仏教学専攻 仏教学仏教史学研究(Ⅰ)専修 彦 坂 千津子

国王を擁する東南アジア大陸部にある国家タイが、歴史的にみて外来の宗教である仏教を受容し、現在にいたるまで王制とともにその地位を確固たるものとしている点に注目し、歴史的な側面から同国の統治に宗教がどのように関わったのか、また王制と宗教、とりわけ仏教を中心として検討する。そして同時に現代のタイ国内で、新しい仏教僧の運動として注目されつつある開発と僧、仏教との問題を取り上げることによって、タイ国が直面する現代の社会と宗教の問題を論じることを目的としている。

第一章では、タイに伝わった上座部仏教の特徴、民衆の信仰形態と宗教実践について考察した。ここでは民衆のタン・ブン思想に基づく仏教信仰の実践と、民衆の欲求に応えうる「福田」としてのサンガの存在があった。経済活動に関わらないサンガは民衆の金銭的、物質的援助がなければ、それ自体で自立できない。民衆がサンガに求めるのは聖性である。また民衆の仏教信仰の動向は、教理に共鳴してというよりも、自らのブン（徳）の獲得のためであった。また、タイの仏教は民衆の求めるところに応じて呪術の機能を備えていることも確認された。

次にサイヤサート信仰は、タイ人の間に広く浸透している土着の信仰形態であるが、一定の体系的なものが存在することが人類学者の研究から明らかになっている。そして、バラモン教や、仏教が弘通して後には、仏教の三宝やバラモン神もサイヤサートの信仰対象に取り込まれてきた。

第二章では、歴代王朝と宗教の関係を考察する。13世紀、クメールの支配から脱して建てられた最初の独立国家スコータイは、ラーマ・カムヘン王の時代にその繁栄の頂点に達する。その子ロ・タイは「タンマラーチャ（法の王）一世」、その子リタイ王はタンマラーチャ二世」と称した。いずれも熱心にセイロンから招来した仏教を信奉したことが碑文によって明らかになっている。リタイ王は三界経を著し、今日まで、寺院の壁面や僧の説教などにその内容が使われ、受け継がれている。仏教繁栄の陰でそれを支援した国王の姿勢は、「偉大なるウバーサカ」として民衆に仏教讃仰の規範を示したといえよう。

次に興った新国家アユタヤは、アンコールの支配者の伝統を継続しようとした。アユタヤにおいて、国王はけっして慈父的な存在ではなかった。

アユタヤの建国者ウートング王はクメール王国から摂取したバラモン教を使って王権の粉飾を試みた。

アユタヤ王国9代目のトライローカーナート王になって、正法王思想が再び現れる。この王は、自ら僧籍に入り、仏教への帰依姿勢を打ち出している。これは国王が僧籍に入った初めての出来事であり、この慣行が受け継がれ、歴代に王が一時的に僧籍に入ることが現在まで続いている。この王は、仏教説話ジャータカを翻訳させ、「マハーチャート・カムルアング」として編集した。

さて、現ラタナコーシン王朝は、基本的にアユタヤを踏襲したものといえよう。ラーマー一世王はアユタヤの文化の再来を目指した。大規模なバラモン教に則った王室儀礼を行なったほか、神王思想の基礎とされる『ラーマヤナ』のタイ語訳『ラーマキエン』を完成させた。この王朝の事業として特筆すべきは、「サンガ法」の制定である。これによって「サンガ」は国家の支配の下に運営を強いられることになり、現在に至っている。

第三章では、現代のタイに登場した開発僧の問題を扱った。1932年、専制君主制から立憲君主制に移行後、王政復古、地域開発がサリット首相により推進され、僧侶も開発政策に狩り出されるようになった。このような社会情勢の中で政府主導の開発に乗らない、仏法でいうところの開発を目指して活動をしている開発僧の出現があることを問題にした。

今後も仏教、バラモン教、サイヤサートに彩られた多様で重層的な宗教文化の中で、タイの人々は信仰心を持ち、実践活動に励んでいくことであろう。一方、開発僧に代表される、多勢に与せず本来の仏法の実践を訴えて活動する人々も少数派であるが生まれてきている。彼らは国際的な NGO に見出され、衆目を集めるようになったのだが、国家や行政当局との軋轢が生じているケースも出てきている。今後の開発僧とそれを取り巻く社会の動きに注目したい。

中世寺院社会と稚児

文学研究科歴史学専攻 日本史研究(Ⅰ)専修 鈴木 裕子

中世において仏教は、信仰のみならず社会のあらゆる側面に影響を与えた。そのため寺院社会を研究することは、中世社会を理解するために重要であり、筆者の関心からすれば、特に子供の教育面で、寺院社会が果たした役割は大きいと考える。しかし寺院で生活する子供たち(稚児)については、これまであまり寺院史研究の分野においても取り上げておらず、まだ研究の余地がある。そこで中世の絵画史料と文献史料を使って、稚児の実態を調べた。

まず、中世の絵画史料・絵巻を使い、稚児の身分による描かれ方の違いを検証してきた。稚児は上童・中童子・大童子に区分されている。上童には特権があり、化粧・華美な装束も認められており、絵巻での上童の描かれ方にも特徴が見られる。基本的に屋内に描かれるが、屋外の時でも肌の露出は控えるように考慮されている。髪は長く毛先が整っており極力手足も描かれない。描かれる向きは、斜め横向きや後ろ向きで、正面姿で描かれる上童はおらず、座る位置は畳の上が多いことが特徴である。

次に中童子は、絵巻の中で畳の上に描かれることはなく、屋内では概ね簀子に位置し、仕事をしている場合が多い。装束は浅黄色・柄付きが多く着用され、髪は毛先が整っていないことなどからも、上童と区別できるように表現されている。

大童子は、常に屋外に描かれ、地面にいて、化粧はなく、描かれる向きも正面や顔の大半が分かるような向きである。履物をはかない時もあり、肌の露出が多く、上童とは全て反対に描かれているのが特徴である。

動作の違いについて、上童は管弦演奏や小弓遊びに興じる場面に描かれる場合があるが、中童子・大童子が遊ぶ姿は描かれず、常に仕事をしていることが多い。特に

大童子の場合、上童と触れ合う場面はほとんど確認できなかった。このように寺院の稚児には身分に応じた役割があり、差別化が図られている。

中世の絵巻では、稚児の描き方にそれぞれ意味があり、階層によって明確にパターン化されている。そこから、寺院で暮らす稚児の階級による待遇の相違が確認できた。

文献史料からは、寺院で生活をする稚児の戒律、教育について具体的な検証と成年層の戒律を比較することで寺院稚児の実態を明らかにした。

参考史料は仁和寺御室守覚法親王が記した『右記』である。寺院稚児に対して特に守覚が主張していることは、師匠に慕い尽くすし、師匠の言うことに少しも違えずその言いつけを守ること。そして勉強・書道・漢詩・和歌を学ぶことに怠らない。特に勉強は早い時期に学び音楽より学問を優先すべきこと。そして物事を披露する場では何事も控えめに充分考慮する。しかし控えめになりすぎず、自信を過剰に出さないことが大切であった。

このことから守覚は、極端や場の空気を読まない者を嫌い、バランスのとれた人間を好んでおり、このような子供が彼の理想とする寺院稚児だと考えられる。

当時の社会の背景上、絵巻で見られるように稚児は華美な衣装を身に付け、化粧を施していた。そのため寺院社会において稚児は身分が高く優遇されていたと考えられる。しかし一方で絵画史料と文献史料を使い寺院稚児について調べてきたが、そこには上述したとおり、絵巻に見る稚児の階層や守覚法親王の主張など厳しい戒律や主従関係強いられていたという実態もある。このようにアメとムチを使い分けられて稚児は、師事する僧に寵愛と規律を与えられ寺院社会で地位を確立していったのであろう。

中世女房と貴族社会

——典侍を中心に——

文学研究科歴史学専攻 日本史研究(Ⅰ)専修 中山 怜子

中世(鎌倉期)における女房研究は、平安期に対して進んでいないのが現状である。その原因の一つに、女房に関する史料が乏しいことが挙げられる。当時の記録の大半を占める男性貴族の日記には、女房の姿が描かれることが少なく、当該期の女房像を復元することが困難になっているのである。また、平安期以降に進行した律令制度の崩壊・変質は、この宮廷の女房制度にも大きな影響を与えているが後宮十二司の一つ、内侍司では、長官である尚侍がまず天皇の侍変化し、次官であった典侍もまた天皇の子どもを産む者が現れるなど変化が進行するのである。

今回、典侍を取り上げたのは、中世においてその実態が明らかにされていない部分が多いからである。尚侍に代わって内侍司の長官的立場になり、政務を取り仕切っていたはずであるが、その様子はあまり記録に残されていない。しかし、一方では天皇との関わりがあったことが確認され、重要儀式に参加していたことも明らかである。中世において典侍が宮廷で果たした役割が何であったのか。その実態に迫るために、本編では第一に典侍に関するデータの復元を試みた。作業としては、中世の古記録に見える典侍関係史料を収集し、それを天皇の代ごとに分類し表にまとめることで、各時期にどのような典侍がいたのか明確にし、それを通じてこれまで明らかにされていない典侍像が見えてくるのではないかと考えた。そこでは、彼女らの家族関係もできる限り特定し、勤仕の実態も表にまとめ一覧できるようにした。時代的には、後白河天皇から花園天皇までを範囲とし検討した結果、いくつか明らかになったことがある。

まず、典侍には中世においても典侍固有の職掌があるということである。前代以来の天皇即位時の褰帳やその即位に関わる八十嶋祭での祭使など、王権の継承に関係のある儀式において、典侍は重要な役割を担っていた。そしてこの役目は、天皇の乳母である典侍が務めることが多かった。さらに、国家祭祀の一つである賀茂祭では、乳母の典侍もしくは、賀茂祭のために特に任命されたと考えられる臨時の典侍が女使を務めていることも重要な事実である。このような王権に関わる重要な儀式や祭祀

においては、必ず典侍が担当し、掌侍など他の女房が務めたという記録は残されていない。それらにおける典侍の職掌の重要性を示すものであったといえよう。その一方で、典侍が後宮女房としての実務を行っていたという史料はほとんどない。蔵人などとの連絡を行っていたのは主に掌侍たちであった。こうしたことから、典侍と掌侍との機能的な差が大きくなり、その身分差がより明確になりつつあったとも考えられる。貴族社会における「家」の成立にともなう、家格の形成が女房たちの世界にも反映しつつあったのではないだろうか。

第二に、典侍の中にも上下関係が生じつつあったということである。乳母の典侍とそうでない典侍の間では昇進のスピードにかなりの差があることがわかった。乳母の典侍の多くは三位まで昇進しているが、そうでない典侍は従五位上あたりにとどまる場合が多かったようである。また、重要儀式でも乳母の典侍が担当していることが多く、そうでない典侍については記録自体が少ない傾向がある。こうした点から、中世の典侍は上級と下級に階層分化していると考えられる。

第三に、鎌倉期になると典侍が天皇の皇子女を産むことが前代以上に一般化してきていることである。特に鎌倉後期になると顕著に現れるようになる。例えば、後宇多天皇に仕えた藤原忠子(藤原忠継女)は、尊治親王(後醍醐天皇)を産み、国母になっている。それまでも女房が皇子女を産むことはあったが、院政期以降に侍妾の産んだ子が「認知」されるようになったことが、典侍の侍変化を促進させたと考えられることができる。

このように鎌倉期の典侍を検証した結果、後宮の形骸化が典侍にも影響を及ぼしたのは確かであるものの、後宮における女房としての重要性は、平安期の典侍とさほど変わりがないように感じられた。『弁内侍日記』や『中務内侍日記』などを著した内侍たちばかりでなく、典侍を含むその上部の女房たちにも焦点をあてていく必要性を感じた。

今回、十分に検証できなかった問題もあるが、鎌倉期における典侍像を少しは復元できたのではないだろうか。

戦国期三河の村落構造

——一向宗との関連から——

文学研究科歴史学専攻 日本史研究(Ⅱ)専修 加藤 裕

本論文では一般的に戦国時代と呼ばれる、室町時代後期から江戸時代初期の三河国の村落社会の構造を、中世の三河国で多大な影響力を有していた一向宗を通じて考察するものである。その構造は以下の通りである。

第1章「村落社会の検討」では、戦国期の村落社会について考えるため、当該期村落研究の代表的事例である和泉国日根荘について検討した。日根荘については、中世の村落研究の重要な史料である『政基公旅引付』があり、多くの研究が蓄積されてきた。その中から日根荘の住人が佐野の市において守護方から人質に取られる事件の検討をおこない、戦国期の近畿地方の村落社会の構成・慣習について考察を加えた。

当時の先進地域であり、史料も豊富で研究の進んでいる近畿地方の村落社会を考察することにより、当然そのまま村落像をスライドさせることはできないが比較検討の対象として位置付けて、戦国期三河の村落構造の検討に活用しようとしたものである。

第2章「三河における一向宗について」では、豊臣期から江戸初期の三河における一向宗の門徒構成の階層的な問題、一向宗と物資流通についての問題、一向宗寺院と不入の問題という三つの問題について検討した。

三河における一向宗の門徒の構成と階層的な問題については、永禄6年(1563)の三河一向一揆について記した『松平記』と『永禄一揆由来』を用いて、一向一揆に参加していた人々(一向宗の人々)の人的構成の検討をおこない、その階層的な問題について考察した。その結果、三河の一向宗は身分の貴賤にとらわれない多様な人々から構成されていたことを導き出した。また、三河に限らず一向宗という集団の教義を検討するため、戦国時代の真宗門徒の掟である『九十箇条制法』や南北朝期に真宗門徒の信心について記した『諸縁探知集』、さらには日本にキリスト教布教のため訪れたイエズス会の伝道者がヨーロッパの本部に対して送っていた日本についての報告である『イエズス会日本通信』の記述から検討を加えた。この結果、一向宗の結束や多様な身分からなる集団の構成が、教義に深く関係したものであることが判明した。

一向宗と物資流通の問題については、井上鋭氏や煎本増夫氏などこの分野の先学の研究をふまえて、天正16年(1588)に、徳川氏が三河の一向宗に対し、京都

への材木運搬を課した際の出来事を取り上げ、この際のやりとりを示す当時の史料である「上宮寺文書」を検討し、三河において一向宗の人々が物資流通について重要な影響力を有していたこと、それが一向一揆以前も以後も変わらないものであったことを結論として導き出した。

一向宗寺院と不入の問題については、三河の一向宗寺院が領主から与えられていた不入の権利が、一向宗寺院にとって単なる利益的な利害のみを意味するのではなく、その存在の根幹にかかわる権利であったということ、新行紀一氏の研究をふまえ、天正期に徳川氏が一向宗寺院に対して与えた文書を用いて検討をおこなった。この結果、一向宗寺院の不入権は一向宗寺院と門徒をつなげる構造上の重要な仕組みであり、天正期の徳川氏はこれを好ましく思っておらず、一向宗寺院と門徒とのつながりを切ろうと画策したが、現実的な問題としてはそのつながりを切ることはできなかった、という結論に至った。

以上のように、戦国期三河の村落構造を一向宗との関連から考えた結果、三河における一向宗寺院は、三河の在地社会の大きな契機と言われる三河一向一揆以前も以後もその存在形態は連続性を有していたことを確認した。このことから一向宗と深く関係する村落構造も一向一揆以前と以後に強い連続性を有していたことを導き出した。従来の研究は一向一揆以前と以後では村落構造は大きく変容したとされていたが、一向一揆以後も本質的には変わらず存在していたと考えるのである。この背景には一向宗の信仰に基づいた、多様な階層の信心の共有による在地社会の結束や、同族間の信心の共有による村落内の結束、交通・流通での強い影響力から生じる村落間の結束があると考えられる。

このように、一向宗は三河の在地社会・各村落、さらには村落内部の結束のための紐帯ともいえる重要な存在であった。三河の村落は近畿地方の村落と比較して、村落内、村落間、さらには土豪なども含めた異なる階層間の結束が一向宗を紐帯として成り立っていたといえる。このような一向宗を紐帯とした在地社会の結束は、当時の実力者である徳川氏といえども容易に手を出せない強固なものであり、戦国期の三河では村落と一向宗の両者が深く密接に関連していたといえるであろう。

中世地域流通の考察

——美濃国の場合——

文学研究科歴史学専攻 日本史研究(II)専修 森川紀子

本稿は、「流通」をキーワードに据え、美濃の地域流通の実態について考察したものである。

第1章「美濃の交通網」では、美濃国内外の交通経路の復元を試みた。美濃は、畿内と東国を結ぶ中継地の役割があり、多くの人々や物資が往来した地だった。美濃が交通の要衝であり、木材の産地として知られていることを示すものとして東山山荘造営をとりあげ、木材流通から交通の様相を概観した。経路は、木曾川などの河川を經由し、垂井・鶴沼(大垣市)で陸揚げして中山道を通っていた。近江に入り、朝妻から湖上で輸送し大津か坂本を經由して京都に入ったと考えられた。この東山山荘の事例から、物資の輸送は自然災害や作業の進行状況、時に政治情勢が関わり頻繁に難渋していたことを明らかにした。例えば、山荘の造営時期は、文明の乱前後にあたり、輸送行程からみて、その混乱が輸送に影響したことが推測された。また美濃国内では、陸路を利用するほかに河川を利用した運材が有効だったことを指摘した。

第2章「地方寺院の経済と流通」は、「消費」に注目して検討した。地域全体ではなく、寺社の消費に着目した。在地の中で一度の消費が多い寺院を見ることで、その特殊性や普遍性が在地の消費の中にどのように反映されているかを知ることが出来ると考えたからである。汾陽寺文書(武芸川町谷口)の天正15年(1578)に行なわれた開山忌の史料をとりあげ、真福寺文書の開山忌の史料で補完して、寺社の消費の実態を検討した。美濃国内では生産されないような物品が多く見られる一方、国内の産物も数多く確認できた。特に、料紙などの紙は、美濃の武儀谷の周辺で生産されたものが消費されたのではないと思われる。紙は、美濃国内各地に生産地があり、日常的に消費される紙のほとんどは在地で生産されたものであったと考えられているからである。また、寺社の贈与が関わる消費についても言及し、寺社の経済状況とあわせて検討した。寺社は、土着の武士に贈与することが多く、禁制を受けるなど、贈与が有効に働いていた。

第3章「地域流通の実態」は、室町時代、寺社のほかに奢侈的商品を消費する在地武士層の消費を検討した。まず、奢侈の商品の扇・文箱・小袖などが、どのような場合に消費される傾向にあるかに着目した。その多くは、書状で確認する限り、進上物として贈ったのではないかと

と考えられる。では、「贈与」自体は、どのような意味があったのだろうか。研究史を整理して、美濃の具体的な事例を検討することとした。贈与自体の研究は、特に経済史の観点を中心に取上げられてきた。羽下徳彦・田中浩司らは経済的見地から考察された。また、年中行事の中で贈与が伴う物がいくつかあり、二本謙一氏も儀礼と贈与の問題を考察された。前者には、年始の祝儀のほか、八朔がある。このような贈与慣行は、室町幕府内で流行ったことが始まりであり、次第に地方に伝播していった。本論文では、土豪毛利氏の文書から八朔の事例について検討した。天文6年(1563)8月6日に、織田(弾正忠)秀信が、毛利小三郎の八朔祝儀に対する返礼であった。春山が使者として毛利氏のもとへ参上して、本書状を渡したことが分かった。また、関連すると思われる書状を参考として検討した。8月6日に秀勝が毛利小三郎に八朔の祝儀について返礼した内容であった。先の書状の内容と一致すること、日付・宛所が類似することから検証の素材とした。同一の時期であれば、本文の「弾正忠かたへ二十疋」は、先の内容を示すものであり、信秀と考えられる。天文期には、慣習として八朔贈遺があったことを示す史料ではないかと考えられる。しかし、武家層においては、八朔を含め儀礼の本来の意味が薄れつつあったと思われ、室町幕府では経済的理由から、儀礼での収入は重要な財源として認識され、八朔は特に重要視された。つまり、本来の意味ではなく、経済効果と関係性の維持の為の贈与に転化したといえよう。

一方、臨時的な贈与は、上位者に対して地位の安定や昇格を願う時に伴った。伊達氏が公的な支配者として地位を獲得する際に、贈与が効果的に作用したことが、羽下氏の考察で明らかとなった。このほかに、上位者の子息が、元服を迎えた際にも進上物が贈られた。このような行為は、関係性の維持のためであったと考えられよう。このほか、地域流通の実態を描くために、交通や市場について整理を試みた。

美濃の流通をテーマに取組んだが、全体を通して断片的で目的や結論が見えにくいものになってしまった。しかし、「交通」と「消費」に着目して地域の資料を検討し、美濃の流通の様相を具体的に捉えることが、本稿の目的であったことを最後に強調しておきたい。

幕末長州藩社会と農民一揆

文学研究科歴史学専攻 日本史研究(Ⅲ)専修 伊藤芳樹

長州藩が幕末維新期に雄藩として飛躍し、維新勢力の中核を成し得た背景には、財政の刷新と支配体制の強化をねらった天保改革の成功や、軍制を大幅に改編した安政改革の成功があった。中でも天保改革は逼迫する藩財政を建て直し、他藩に先んじて幅広い階層から人材登用を行った大改革であった。

藩が天保改革に着手する契機となったのは、天保2(1831)年7月に藩領の瀬戸内地域において勃発した農民一揆であった。この一揆は、他の中部山間地域や日本海沿岸地域の農民をも巻き込んだ全藩的一揆に発展し、藩に農民の持つ反封建的エネルギーの大きさを強烈に印象付けた。藩はこの一揆によって、封建的支配体制の貫徹が困難な状態に陥っていることを痛感し、支配体制の再編と強化を目的とした改革の実施に踏み切ったのであった。

後に「長州藩天保一揆(防長大一揆)」と呼ばれたこの大規模な農民一揆が勃発した原因について、藩の史料である『騒動一件諸沙汰御用状控』や『諸郡百姓騒動日記』には、夏に皮革を運搬すると暴風雨が起り、その年は領内が凶作に見舞われるという伝承が藩領に流布しており、藩の特権商人の持ち物の中から皮革が発見されたことに農民が憤慨したからであると記されている。しかし、天保一揆において強力な反封建的エネルギーを見せ付けた農民が、単に「伝承」のみを理由にして一揆を起こしたというのは果たして真実であろうか。また、伝承の中に出てくる「皮革」の扱いを生業としていた被差別部落民(主に穢多階層)と農民との関係はどのようなものであったのだろうか。

本研究では、長州藩天保一揆と伝承を中心に据えて長州藩と農民との関わり、農民と被差別部落民との関わりを考察することにより、近世後期の農民層をより多面的に捉えることを目的としたものである。以下、研究の概要を示す。

第一章では、近世後期長州藩の農民層と村落の実態を豊富な先行研究を参考にまとめることによって、藩の村落支配体制が村役人層に大きく依存していて、村役人の

発展に伴って中・下層農は困窮していたこと、さらに中・下層農は困窮から脱却するために、綿に代表される商品生産を行い、次第に分化していったことによって農民の階級に矛盾が深刻化していたことの二点を確認し、農民が反封建的エネルギーを持つに至った過程を整理した。

第二章では、先に挙げた藩側の史料二点と、残されていた民間史料との対比を行い、より農民の立場に近い形で書かれたと考えられる民間史料から一揆勃発時の農民の動向を読み取った。さらに一揆を起こした農民達が藩に提出した要求も合わせて考察し、当時の農民層と藩役人との対抗関係や下層農民と村役人層との対抗関係を確認し、それにより、天保一揆が伝承に端を発していたと断定することは出来ないのではないかという仮説を立てた。

第三章では、前章の「天保一揆は伝承にのみ端を発したのではない」という仮説をより確かなものとするため、皮革を扱っていた穢多階層に焦点を当て、長州藩領の穢多階層の実態を解明した。その上で、天保一揆に至るまでの農民と穢多階層の対立の歴史を辿ることによって、天保一揆勃発の背景には農民の藩に対する怒りのみならず、被差別部落民への強い差別的感情も存在したことを確認した。ただし、その差別意識も決して伝承によって根深くなったものとはいいい切れず、藩の身分政策の展開や被差別部落民の生活の向上などによって深刻化したものであると考察した。

最後に第四章で研究の総括を行い、天保一揆は伝承のみを理由にして勃発したとはいえないこと、当時の農民は伝承を盲信し、伝承に引きずられて一揆を起こすような存在ではなかったこと、以上二点を結論として挙げた。

本研究の成果は、藩の史料と民間史料の対比によって、当時の農民の動向や意識により深く分け入ったことである。しかし、さらに職人など他の被支配者層の実態や被差別部落の村落形態などがさらに明らかになれば、より明確に近世後期の農民像が浮彫りになるであろう。

軍縮期における日本海軍の演習事故と情報政策

文学研究科歴史学専攻 日本史研究(Ⅲ)専修 大 浦 崇

防衛研究所が所蔵する旧日本海軍の公文書『公文備考』を利用して、海軍軍縮条約期末の1930年代前半における海軍の情報政策を、この時期多発していた演習事故とこれに対する事故処理を通じて考察した。

太平洋戦争期における海軍の情報操作・秘匿などの情報政策は、その影響力の大きさにもかかわらず、これまであまり研究されることがなかった。本稿では、太平洋戦争へ至る以前、マスメディア統制の実情などの時代背景を踏まえた上で、軍縮期の海軍情報政策の変化とその特徴を明らかにした。そしてさらに日露戦争後から太平洋戦争期に至る情報政策の転換過程についても考察を加えた。

ワシントン・ロンドン両海軍軍縮条約の締結により、日本海軍は米英に対して6割という劣勢の軍艦保有比率に押さえ込まれた。しかし既定方針であった「対米7割」の戦備の保持という観点から、不足する戦力分を技能の高さや攻撃性能で補おうとしたので、猛烈な訓練や過度な艦艇の重武装化を余儀なくされた。これからの方針は結果として演習事故を頻発させる原因ともなった。

一方で、軍縮期は大正デモクラシーや平和志向の風潮にあり、新聞社など言論機関には軍への不信感などから演習事故に対して批判的な姿勢が強く、軍部としても、これら不祥事には厳正な対応をもって対処せざるを得なかった。しかし昭和に入り、昭和6年の満州事変勃発を境として言論機関の姿勢は180度の転換を見せ、反面、政府や軍部の言論統制が一段と厳しくなっていった。

積極的大陸進出と、それによる国際的孤立化、一方で協調外交の名残である軍縮条約制限下という状況のなかで、昭和9(1934)年6月末に発生したのが「深雪、電衝突事件」である。

事故そのものは、駆逐艦「電」と「深雪」が衝突したもので、「深雪」は後に沈没した。事故処理から公表までを詳しく検証したが、特に注目されるのが事故処理の段階における一連の情報統制の動きである。海軍省の方針の下で、事故の詳細を秘匿する動きが徹底されるとともに、国民への公表に関しても作作的な情報の統制と秘匿が行われていたことを明らかにした。

これ以前の昭和2年に発生した「美保ヶ関事件」や、昭和9年3月に発生した「友鶴事件」も同様に検証してみたが、両事件では情報統制や操作は見られず、むしろ

事故を踏まえて厳正な再発防止策や、責任者に対する処分など、厳正な対応がとられている。

一方、昭和10年に発生した「第四艦隊事件」では、事故発生直後より情報の隠蔽や事故の規模を過小に抑えようとする動きがあり、公表された情報量も「深雪、電衝突事件」と同様に少ない。つまり、直前の時期も含めそれ以前に発生した事故では、情報操作の動きは見られないのであるが、その後の軍縮期間内に発生した演習事故では情報操作が大々的に行われている。

軍縮期以前の状況は、先行研究によって日露戦争以降は、海軍の地位が高まったこともあり、多少の不祥事でも情報操作などによって批判をかわし、詳細を秘匿する事ができる環境であったことが明らかにされている。これが軍縮期に入る頃になると、時代背景もあつたのだろうか、軍に対する言論機関の批判が高まり、軍も情報統制を手段として使用できにくくなり、軍に対する信用・信頼というイメージを重視する対応や取り組みへとその姿勢を変化させざるを得なくなったのである。

しかし満州事変後、言論機関の軍部への追従という方針転換と言論統制の強化という時代背景、さらには度重なる演習事故、また昭和9年に軍縮条約放棄の方針が決まり、軍備拡張を円滑に進めるためにも国民の信用を失うわけにはいかなかったことなど、情報統制が再び行われる諸条件が揃っていたのであり、このような条件下で発生したのが「深雪、電衝突事件」であった。

これ以後、日中戦争の勃発から総動員体制・戦時体制へと進む時代の流れの中で、強固にこの情報統制政策が維持されたものと考えられる。太平洋戦争開戦時に、海軍は情報を正確に公表すべきであると陸軍と申し合わせていたにもかかわらず、ミッドウェー海戦敗戦時には、むしろ海軍側から被害を過小にみせることを陸軍に提案しているなど、軍への信用・信頼を重視する姿勢が垣間見られるという指摘もある。

以上のことから、「深雪、電衝突事件」は軍縮期日本海軍の情報政策においては重要なターニングポイントとなったことを確認し、その海軍の情報政策変化の過程を明らかにするとともに、これを通じてその情報政策の基底には、とりわけ信用・信頼というイメージを重視する姿勢が強くみられたことを明らかにした。

唐武宗期における宗教政策

文学研究科歴史学専攻 東洋史研究(Ⅰ)専修 伊藤 ゆかり

唐王朝はその前の隋王朝を受け継ぎ未曾有の大版図を領有するに至り、広くその内にある文化を包含した。この頃伝来した景教・祆教・摩尼教等の諸宗教は自由な発展を遂げた時代であった。とくに仏教は隆盛を極めた。

仏教は後漢の時代に伝来し、東晋の時代に流行するようになった。その後仏教は為政者による保護や奨励、あるいはその逆の廃仏かの政策の中で消長を繰り返した。中国仏教史上いわゆる「三武一宗の法難」とよばれる四度の廃仏事件があった。これは、北魏の太武帝・北周の武帝・唐の武宗・後周の世宗等によるものだ。本論文では唐の武宗期の宗教政策に注目し、どうして廃仏が行われるに至ったのか、その目的について考察した。

第一章では、唐朝の変遷から武宗の在位期が唐代においてどのような時期にあたるのか考察した。

唐朝は第二代太宗から第三代高宗の頃、諸制度の整備、武力の充実によって対外的発展をとげ、広大な領土を形成した。その後則天武后の周王朝によって唐は一時中断するが、第六代の玄宗が即位してからしばらくは比較的安定した時代をむかえた。しかし、玄宗期頃から、異民族対策として設置された節度使がその勢力を伸ばしはじめ、節度使による反乱いわゆる「安史の乱」が起こる。この戦乱によって多くの流民が生まれ、本貫から離れたことで律令体制に大きな打撃を与えた。また、内地においても節度使が設置されるようになると、唐朝の統率力はますます弱まっていった。こうした唐朝の弱体化に乗じて回鶻や吐蕃が侵入し、唐王朝は征服地域の大半を失った。武宗は節度使の勢力が強まり、回鶻等からの侵入に脅かされていたときに即位した。

第二章では、武宗の人物像と、その在位期における対外的・対内的・宗教的出来事についてとりあげた。

唐室李氏はその姓が同じであることから、自らの家系の先祖を道教の尊ぶ老子とすることで、自己の家系を権威づけた。よって、ほぼ唐一代を通じて「道先仏後」という宗教政策をとった。これは道教を仏教よりも優位に扱うという意味ではなく、順序では宗室の宗教である道教を先とするものだったが、武宗は即位以前から道教を崇拝し、即位後は道士の趙帰真等を重用した。そのため、武宗は宗教の中では道教を優位に扱っていた。道士らはたびたび仏教の排斥を武宗にもちかけた。これが、仏教を中心とする外来諸宗教の廃毀へのきっかけとなったの

である。

武宗の在位前半期は、対外的には幾度も回鶻による侵入があり、対内的にも北方で節度使による反乱が相次ぐなど安定した時代であったとはいえない。しかし、後半期には、回鶻を打ち破り、国内の反乱も収束をみせると次々と宗教沙汰が出されるようになったことを解明した。

第三章では、第二章においてとりあげた中から、宗教関連の事象について考察した。

武宗は道教を崇拝し、即位当初より道士を重用し優位に扱ったが、降誕日には内齋を設けるなど仏教行事をまったく行わなかったわけではなかった。前半期においては唐代でも幾度も行われた仏教保護の一環ともいえるべき仏教整理を行っていたのである。その後、会昌三年(八四三年)には回鶻が信仰していた摩尼教を弾圧したり、剃髪した頭を隠した僧を捕えるといった旨の勅が出されるが、これらは回鶻人に関連するものを唐から廃除したり、僧にまぎれた反乱の関係者を捕えるために行われたのであり、宗教的目的によるものではなかった。

後半期、国内の内乱が収束した会昌四年からは急激に仏教廃毀へと向かいはじめた。限られた数の寺と僧尼を残し、それ以外の僧尼を還俗させて両税戸にあて、仏教施設を壊し、金属製の像・財物等を徴収した。仏教に限らず、外来の諸宗教も同様に沙汰の対象となった。寺などの廃材は駅舎等の補修に使われた。金属製の像などは宗教施設以外にも各家からも徴収され、銭や農具の鑄造に用いられた。つまり、国にとってこの時の宗教沙汰は仏教そのものをなくそうとするより、仏教教団が保有していた財物・労働力等を徴収することこそがその目的であったと考えられるのである。武宗期は回鶻との戦い、内乱の鎮圧などのために疲弊した国庫を潤す必要があった。そのため、肥大していた仏教教団を肅清し、その財物を国庫へ、還俗させた僧尼・奴婢を両税戸に充てた等の諸点を明らかにした。

武宗による道教崇拝はひとつのきっかけとはなるだろうが、あくまで唐朝にとっての宗教沙汰の目的は外来宗教そのものの排斥ではなく、それらの有する土地・財物の徴収にあり、経済政策の一環として行われたものであったのである。

ボッティチェリの絵画とその歴史的背景

文学研究科歴史学専攻 西洋史研究(Ⅰ)専修 太田衣美

従来、ボッティチェリ(1450年～1510年)のサヴォナローラへの心酔説が際立って主張されてきた。その要因は、ヴァザーリの伝記『ボッティチェリ伝』の記述に頼るところが大きい。これに対し、高階秀爾氏はこの伝記の曖昧性(没年の違いなど)に加え、絵画、パトロンなどの見地からボッティチェリはサヴォナローラに心酔してはいなかったと結論づけている。本論文は、ボッティチェリのその精神面を再考するために、ボッティチェリの周囲の人物、そして最も影響を与えたとされる説教僧であるサヴォナローラに焦点を当てた。そしてサヴォナローラを取り上げるにあたり、説教内容を積極的に活用した。フィレンツェ全体の精神的な風土を理解できるとともにフィレンツェでの彼の重要性を知ることが出来るからである。絵画においては、客観的に比較可能な史料を採用した。

まず第一章では、ボッティチェリが庇護を受けていたメディチ家がフィレンツェの支配者であった時代を当主のロレンツォとピエロの時代に分けて概観した。この時代は、メディチ家をパトロンに持つボッティチェリが華々しい開花を見せた時代でもあり、彼の人生で描いた大半の絵画がこの時代に属する。代表的絵画は、「プリマヴェーラ」(1478年)や「ヴィーナス誕生」(1485年)など新プラトン主義の影響が強く見られる作品であり、他にも古典的題材が多い。ともに華やかな印象が強い。

第二章ではサヴォナローラが台頭し、フィレンツェの事実上の支配者となるまでを取り上げた。サヴォナローラが初めてフィレンツェに来たのは、1482年春にサン・マルコ修道院の聖書講師として着任した時である。それ以降、彼が行った激しい説教は民衆を震撼させ続けた。サヴォナローラは、支配者であるメディチ家、世俗化した教会、教皇をも激しく批判し、享楽に耽っている民衆に「悔い改め」を説き、「キリスト的生活」を模範とするよう主張し続けた。その後サヴォナローラは事実上左遷され、1490年再びサン・マルコ修道院の修道院長として赴任を果たす。この再赴任はビーコ・デラ・ミランダ伯のロレンツォへの口利きがあったとされる。これ以降、サヴォナローラの説教は預言的要素が強くなっていった。彼のフィレンツェでの権威を一気にあげたのは、フランスのシャルル8世のイタリア侵入を預言したことにある。以後サヴォナローラは、実際に侵入してきたシ

ャルルへの使節団の首長に政府によって任命され、当時ピエロの犯した失態をよそに着実に政治的権力を持っていく。しかしこの預言は、サヴォナローラの周囲の人物に着目すると、知り得る可能性は十分にあったと考えられる。メディチ家の追放後、サヴォナローラはフィレンツェの事実上の支配者となった。説教の内容は、政治的な面への言及が目立つようになり、事実サヴォナローラの提唱した「大評議会」がわずか10日で発足した。この頃からサヴォナローラの非難的であった教皇はさらに態度を露骨化していき、彼の権威に危機感を抱き始めて破門を宣言する(1497年5月13日)。しかしフィレンツェで一気に上がったサヴォナローラの熱も下がり始め、反対派である怠慢派の暴動が何度も起こっている。そして次第にキリスト的生活を行ってきた市民の間から食糧不足などの理由により、メディチ家を愛おしみ「パッレ、パッレ」という不満の声が上がりだす。サヴォナローラはその動きを翻すため二度に渡り「虚飾の焼却」を行うが、その成果は得られず、有名な「火の試練」後、1498年5月23日火刑に処される。

第三章では、これまでのフィレンツェの歴史的背景をもとにボッティチェリへのサヴォナローラの影響を彼の絵画や周囲の人物により考察した。そして宗教画にも注目し、試論を展開した。ここで核となるのは、メディチ家支配時代に描かれた古典的題材の絵画がサヴォナローラ支配時代にも描かれているという点である。それらの絵画はパトロンによりサヴォナローラ派、反サヴォナローラ派のものに描き分けられている。そして私的な理由から描いた1490年代前半の「誹謗」には、古典的要素とサヴォナローラ支配時代に見られる神秘的要素の混在が見られる。もう一つ注目すべき点は、ボッティチェリのパトロンを除く周囲の人物である。ボッティチェリは、熱心なサヴォナローラ派であった兄シモーネや、怠慢派のリーダー格であるドッフォ・スピーニとも親交があったことが確認できる。

以上のように、これまで定説のように言われてきたボッティチェリのサヴォナローラへの心酔説には、多くの矛盾が認められる。生涯殆どフィレンツェを離れることなく過ごしたボッティチェリがサヴォナローラの影響を全く受けていなかったとは考えにくい。彼が熱心なサヴォナローラ派であったとは認められないのである。

19世紀におけるイギリスの対中東政策

——「インドルート」から見た一考察——

文学研究科歴史学専攻 イスラム圏史研究専修 猪 智 朗

19世紀に重要性が増すインドと関連し、インドルートとしてメソポタミアとエジプトが注目される。この両地域に敷設されたアレクサンドリア-カイロスエズ鉄道とユーフラテス川流域鉄道に焦点を当て、さらに同時期にフランスが開鑿するスエズ運河とも比較していく。さらに19世紀中葉のイギリス首相パーマストンの対中東外交政策からイギリスが構築した国際関係を明らかにしていこうとする。

第一章では、イギリスの対中東政策が構築される前提として、ヨーロッパにおけるオスマン帝国の立場、エジプトとオスマン帝国の関係、そしてこれらの地域における既存の運輸方法を明らかにする。オスマン帝国は「ヨーロッパの病人」と呼ばれた。それはオスマン帝国の弱体はヨーロッパの勢力均衡を崩しかねないものであったからである。実際エジプトは弱体しきったオスマン帝国から総督位の世襲権を獲得している。それ以降完全な独立を目指すエジプトとエジプトの世襲権を排除しようと試みるオスマン帝国との対立が生じるようになる。またその対立の中心として、1841年以降のフェルマーンには「オスマン帝国が諸外国と結んだ条約はエジプトにも適用する」、「エジプトはスルタンの許可なく諸外国と条約を結んではならない」という決まりがあったことにも留意しておく。また一方既存の運輸方法については、蒸気船や家畜を使用するものであった。そこに至る時間は、エジプトのアレクサンドリア-スエズ間を例に取ると、50時間で、また郵便は88時間を要しており、このことから膨大な時間を要していたことが分かる。

第二章ではアレクサンドリア-カイロスエズ鉄道に焦点を当てる。この鉄道建設における問題は、建設費用や技術的問題ではなく、スルタンの権威を巡る問題であった。オスマン帝国の世襲権撤廃の企てから身を守るためイギリスの支持を得ようとしたエジプトは、その代わりにエジプトにおける鉄道の建設を許可するが、一方オスマン帝国はそれを1841年のフェルマーンに違反すると宣言した。そこから生じたスルタンの権威問題からイギリスが得たものの中で最も重要だったことは、鉄道が建設できたことではなく、オスマン帝国とエジプトの対立において両国に絶大な影響力を有するようになったことであった。またそれを可能としたのは、カイロ駐在大使のミュレーイでもイスタンブル駐在のストラトフォード

=カニングでもなく、その二人の主張を絶妙に取り入れたパーマストンであった。

第三章ではユーフラテス川流域鉄道について焦点を当てる。この鉄道の建設は失敗に終わった。この鉄道は、インドへの所要時間の短縮もさることながら、鉄道沿線に埋蔵されている鉱物や広大な土地に大きな価値があった。しかしその鉄道建設を失敗に追い込んだのはパーマストン自身であった。それはフランスとの関係を憂慮したことであった。または同地域で後に建設されたバグダード鉄道と比較してみると、その鉄道から得られる利益の大きさから、建設者が国であり、またイギリス一国であったことに問題があることも分かった。

第四章ではスエズ運河建設におけるパーマストンの行動に焦点を当てる。レセップスは運河開鑿にあたって、ヨーロッパ各国に支援を募っており、それはイギリスに対しても例外ではなかったため、スエズ運河は国際的性格を有しており、イギリスにとっても不利益なものではなかった。それでもパーマストンが反対し続けたのは、イギリスがエジプトとメソポタミアに鉄道計画をもっており、そちらの方がイギリス専有であるため自国に有利であったからである。

第五章では以上の政策で主要な役割を果たしたパーマストンとカニングに焦点を当てる。以上三つの政策におけるパーマストンの態度を比較してみると、パーマストンはインドルートにおける鉄道から得る商業的利益を重視していたのではなく、インドルートを軸としてイギリスの中東への影響力の強化と持続を一番重視していたといえよう。またカニングにとってイギリス-オスマン帝国間の関係の強化は、中東におけるイギリスの利益を最も保証することであり、またそれはイギリス優位のヨーロッパの勢力均衡を維持させることにもつながるものであった。この勢力均衡という点が、カニングにオスマン帝国を特別視させる最も大きな要因であったと考えられる。

パーマストンは一般的に自由貿易をイギリスの国策として第一に推進しようとしていたと言われるが、以上のことを踏まえると、貿易よりも国際関係を重視し、イギリス中心のヨーロッパ国際関係の中で得られる政治経済上の利益を求めていたことが推測できた。

第一次世界大戦前における独土関係についての一考察

——バグダード鉄道建設を通じて——

文学研究科歴史学専攻 イスラム圏史研究専修 大前 美奈子

1914年に勃発した第一次世界大戦にオスマン帝国は三国同盟側に立って参戦した。その背景には、ドイツとオスマン帝国の間に友好的な関係が存在したからであると考えられる。そこで、その友好的な関係に大きな影響を与えたのが、1890年代から進められていたドイツによるバグダード鉄道建設という事業であると仮定した。

バグダード鉄道に関して国内外問わず多岐に渡って研究されている。代表的な研究として以下に挙げることをする。

杉原達氏はドイツ国内の政治社会史的観点からバグダード鉄道建設をドイツ帝国主義の進展を促したものとして考察している。著書では、ドイツの中東政策を政治・経済的側面だけでなく、社会や文化という側面から捉えている。また、バグダード鉄道建設に関するドイツ国内の反応を社会階級別にまとめている。

池田博行氏はオスマン帝国内の他の鉄道とバグダード鉄道を比較し、その歴史的意義と重要性を論じている。特にオスマン帝国における交通の発達と列強の関係や帝国の経済的衰退、そしてバグダード鉄道建設を通じて第一次世界大戦へと繋がっていく過程を考察している。

三井卯三男氏はバグダード鉄道建設という問題を列強間における帝国主義的対立に主軸をおいて述べている。20世紀初頭、第一次世界大戦が勃発する以前の英仏露とドイツ・オスマン帝国との外交関係をバグダード鉄道建設計画に対する各国の立場やその交渉過程を詳述している。

国外では特にアール (E. M. Erle) 氏の研究が有名である。アール氏はバグダード鉄道建設をドイツの帝国主義的膨張という観点からその重要性と影響を論じている。ドイツは経済的関心を持って中東へ進出して、バグダード鉄道建設事業が英仏露などの列強との対立を生じさせ、中東における第一次世界大戦勃発までの一時的な優勢をドイツが勝ち取ったと述べている。

ヴォルフ (J. B. Wolf) 氏はドイツと他の列強との外交史的観点からバグダード鉄道建設に関する研究を行っている。特に、バグダード鉄道建設を戦前の欧州列強の帝

国主義的対立を軸に、第一次世界大戦勃発の一端を担ったものであると位置付けている。

このようにバグダード鉄道建設に関する諸研究は様々な見地からなされているが、私はバグダード鉄道建設という事業がドイツとオスマン帝国との間に友好的な関係をもたらす一要因となったのではないかと考え、それを焦点として研究してきた。

第1章では、バグダード鉄道建設以前における両国の状況及び関係について述べた。19世紀におけるオスマン帝国の経済破綻と列強による財政の支配、同時代のビスマルクによる外交政策、特に中東政策の一環として考えられるオスマン帝国への軍事支援などに触れた。

第2章では、列強によってオスマン帝国内に建設された鉄道や、バグダード鉄道建設に関する具体的な経緯などを述べた。また、バグダード鉄道建設に関わる事象として、アルメニア人問題やヴィルヘルム2世の聖地訪問についても触れた。

第3章では、英仏露のバグダード鉄道建設に対する反応を述べた。アナトリア地方やバルシア湾周辺に経済的関心を持つロシア、シリアに経済的利害を持ちオスマン帝国におけるキリスト教布教のイニシアチブを握っていたフランス、インドルートを防衛しなくてはならないイギリスなど、バグダード鉄道建設はこれら列強の利害に多大な影響を与えていたのである。

バグダード鉄道建設という事業はドイツ及びオスマン帝国の両国に恩恵を与えたと言っても良いだろう。ドイツの目的は原料供給地及び市場であり、スルタンにとっても専制支配を確固たるものにするという考えから非常に重要なものであった。バグダード鉄道建設とそれに関係する出来事からスルタンはドイツに対し好印象を持っていたことは容易に想像できる。イギリスやフランスなどとは異なり、ドイツもオスマン帝国と親密な関係を築こうとしていたと言えよう。このように、オスマン帝国において最終的に協力関係となることのできるのドイツだという考えが、軍事的支援やバグダード鉄道建設という流れを通じて生じていたのではないだろうか。

石槍文化の研究

——出現と発生に関する予察——

文学研究科歴史学専攻 考古学研究専修 小栗 康寛

始良 Tn 火山灰が降下した後期旧石器時代に石槍と呼ばれる石器がどのようにして出現し、日本列島全体へと広域に展開していくのかを技術構造の変動という観点から検討を試みた。

第1章では、日本における石槍の研究史を概観した。相沢忠洋が群馬県岩宿遺跡で黒曜石製の石槍を採集したことから始まった石槍の研究は、主に石槍文化の編年的位置付けの特定と石槍がどのようにして出現したのかといった論究が試みられてきた。その結果、石槍はナイフ形石器や角錐状石器と共伴する時期と後期旧石器時代終末から縄文時代初頭の二つの時期に存在することが明らかとなった。とりわけ石槍の出現については切出形石器及び角錐状石器に発生過程が求められた。

第2章では、石槍の定義と分類を再検討した。日本における石槍の定義は「両側縁からの平坦剥離による加工で尖頭部を意識的に尖らした槍先形の石器」で、石槍の素材は剥片の他に礫片あるいは礫のままでも製作が可能であり、完成までには素材の8～9割程度が二次加工によって器体を変形させながら製作される。また石槍は旧石器時代から弥生時代に至るまで長期に至って用いられた。つまり、石槍は大きさや形態、加工、素材などが複雑に絡み合って構造的に構成されていることが理解でき、石槍を分類することは石槍をどのように吟味するのか、本論では石槍が角錐状石器や二側縁加工のナイフ形石器といった他の狩猟具のなかでの有機的な結びつきをとおして、石槍の持つ特徴を把握することができると考える。これらのことを踏まえて、石槍の展開を追求していくと、従来の説とは異なる知見が得られるとともに石槍の出現とその展開の過程を想定することができるのである。

第3章では石槍の編年的位置付けと地域間比較を目的として関東地方・九州地方・環瀬戸内地域の石器群変遷を再検討した。関東地方では層位的にV層下部、V層上部、IV層下部段階と層を輪切りにして検討した。関東地方ではV層下部段階に石槍は認められないが、V層上部段階になると切出形石器や角錐状石器とともに縦長剥片を素材とした周辺加工の石槍が製作されるようになる。IV層下部段階に至ると横長剥片を中心に第一剥離面を大きく残した半両面加工や両面加工の石槍など複数の形態が存在することがわかり、後の段階の中部・関東地方を

席卷する砂川期の石槍文化の母胎を構築しているようである。九州地方では始良 Tn 火山灰とともに鍵層となる薩摩火山灰が堆積した重層事例が多数検出されている南九州を中心に検討した。九州地方では関東地方でいうV・IV下層段階を、切出形石器を主体とする石器群、剥片尖頭器と台形様石器を主体とする石器群、基部加工のナイフ形石器を主体とする石器群、大型のナイフ形石器を主体とする石器群、角錐状石器を主体とする石器群を二つの時期に分け、大きく六段階に細分を試みた。九州における石槍は筆者の言う九州II期の剥片尖頭器と台形様石器を主体とする石器群の段階に相当し、粘板岩を素材とした両面加工品が製作された。後には角錐状石器が盛行する段階でホルンフェルスや頁岩製の石槍とともに石槍と角錐状石器の中間的なものと考えられる「石槍化した角錐状石器」が特徴的に発見されていることが判明した。中国・四国・近畿地方を含めた環瀬戸内地域では国府型ナイフ形石器を主体とする石器群、周辺加工の石槍と角錐状石器を主体とする石器群、小型切出形石器を主体とする石器群の三段階に細分した。石槍は環瀬戸内II期で横長剥片を素材としたサヌカイト製の周辺加工品が製作され、III期には「馬見型」と呼ばれる他地域では認められない周辺加工の石槍の発展過程が認められた。

第4章では始良 Tn 火山灰以降における三つの地域の石器群変遷を試案し、石材、技術構造、狩猟具の形態などを地域間で比較検討することで、「石槍」の出現、伝播、広域的展開、地域的展開及び石槍の卓越化を予察した。始良 Tn 火山灰降灰以降の石器群変遷は九州地方と環瀬戸内地域で部分的に一致した変遷が想定できるが、関東地方は石材差や環境を含めた地域差が強く、西日本と比較すると複数段階が同一層から検出される状況が看取された。また石槍は九州地方で特殊な発達を遂げたことが理解され、それは石材と密接に関わる石槍の出現と変遷だけではなく、石材の拡充と選択とともに、該期の主体的なナイフ形石器や角錐状石器が複雑に変化していく過程においても一貫して石槍が製作される。ナイフ形石器の場合には「周辺加工の石槍」の派生、角錐状石器の場合には「石槍化した角錐状石器」の派生を促進したと考えられる。こうして関東地方から西日本にかけて石槍が柔軟に対応し、定着していくことが理解された。

瀬戸・美濃地方における初期連房式登窯の変遷

文学研究科歴史学専攻 考古学研究専修 中村麻里

連房式登窯とは、焚口と主要な燃焼室を窯体の下方に設け、その上に10室、あるいはそれ以上の焼成室を連ねた構造の窯体である。日本に連房式登窯が導入されたのは、16世紀末のことで、朝鮮半島の陶工らによって肥前地方に伝えられたとされる。そして、17世紀初頭に肥前地方で技術を習得し持ち帰った陶工によって、瀬戸・美濃地方にも連房式登窯が広まることとなる。

20世紀初頭以前の日本近代における連房式登窯の構造は、丸窯系、古窯系、京窯系、益子窯系の4種類に分類されており、肥前地方は丸窯系、瀬戸・美濃地方は古窯系が主体であるとされている。とすると、瀬戸・美濃地方の連房式登窯は、肥前地方から窯体構造が導入されたことと伝えられているにもかかわらず、なぜ古窯系が主体であるのかという疑問が残る。むしろこの分類は、日本近代において稼働していた連房式登窯の分類であるとともに、考古学的な発掘調査が本格的に行われる以前の分類であり、発掘調査の進展によって、瀬戸・美濃地方の連房式登窯導入期の様相が徐々に明らかにされつつある。

そこで本稿では、そうした発掘調査の成果に拠り、狭間構造（通炎孔）をはじめとする床面構造を検討することにした。

第1章では、今日までに行われてきた瀬戸・美濃地方における初期連房式登窯の発掘調査を研究史として取り上げた。

第2章・第3章では、瀬戸・美濃両地方の調査報告事例を、報告書に記載されている窯体構造図をもとに加筆修正を行い、自らが計測した上で紹介している。

第4章では、初期連房式登窯の分類と変遷について述べている。それによって、瀬戸・美濃地方における初期連房式登窯の構造は、大きく「a類有段横狭間式」「b類無段斜め狭間式」「c類有段斜め狭間式(床面傾斜)」「d類有段斜め狭間式(床面水平)」「e類有段縦狭間式」「f類分炎柱連房式登窯」に分類できることを確認した。

そして、瀬戸・美濃地方の連房式登窯は、a類からe類の順で変遷をしているようであり、また、f類に関しては瀬戸地方にのみ見られ、この構造が長く受け継がれるのではなく、d類やc類に集約される可能性を指摘した。

さらに、狭間状況だけでなく、焼成室の幅と奥行の関係、天井支柱の有無、床面の段差等からその変遷をたどると、焼成室の幅と奥行は、時代を追うごとに幅の広がりが見られるのであるが、初期連房式登窯の時期には明確には現れていないこと、天井支柱に関しては、焼成室幅が200cmを超えるものには設けており、床面の段差はc類からd類に移行するにあたって大きくなることなどを明らかにした。

なお、その後の展開としては、磁器が焼成される19世紀初頭以前の瀬戸・美濃地方における連房式登窯は、ほとんどの窯体でe類の構造を有することとなる。しかし磁器を焼成する頃になると、磁器質の製品や大型の製品の焼成に適していると考えられた丸窯と呼ばれるa類の構造が再び採用されるのである。一方、それまでのe類の構造は、小形の磁器を焼成する窯と、陶器を焼成する窯に区別されるようになり、前者は古窯、後者は本業窯として使用され続けることとなる。また、これらの区別は瀬戸地方におけるものであって、美濃地方では、e類の構造をそのまま磁器焼成の際にも使用している。

ところで、初期連房式登窯の変遷を考える上で、狭間構造からその変遷過程を明確にするには、特にd類からe類への変化を立証する調査事例を軸にして、地域差や時間差とも分布圏の差異を検討することによって解決していかなければならない。おそらく、焼成室間の段差の登場や、天井支柱の必要性などはそれらに起因すると考えられる。

今後は、初期における連房式登窯を観察するだけでなく、連房式登窯の確立期の構造から初期の様相を見たいと考えている。

ゴスペルの貢献

——黒人女性歌手をとおして——

文学研究科英語圏文化専攻 英語圏文化研究(V)専修 保 科 由美子

アメリカの黒人音楽の研究をとおして大衆文化（ポピュラー・カルチャー）を探ろうとする研究家 Jerma. A. Jackson の著 *Singing in My Soul* によれば、これまでの黒人音楽の研究は主として世俗的な音楽であるブルースやジャズを中心になされてきた。しかしながら、Jerma も指摘するように、黒人の音楽にはブルースやジャズと平行するように宗教音楽のカテゴリーにも入る「黒人霊歌（スピリチュアル）」「ゴスペル」があり、その起源はアフリカから連れてこられた黒人奴隷が労働の苦しみや悲しみからの「救済」を願ってこれらの宗教音楽に求めたことにある。

こうしたゴスペルの起源とその発展の歴史を探る中で、ゴスペルが今日のアメリカ大衆文化の一つとして認知されるのに二人の女性ゴスペラーが深く関わっているこ

とをこの論考で明らかにする。その二人とは、1940年代から'70年代にかけてアメリカからヨーロッパまでゴスペルの公演活動をしてゴスペルを白人社会も含めて広くアメリカ社会に認知させたロゼッタ・サーブと、ゴスペルの女王として知られるマヘリア・ジャクソンである。なぜ男性ではなく女性がゴスペル音楽の担い手になったのか、そこにはゴスペルが黒人を主たる信者とする教会における大衆向けの布教活動の一つとして発展してきたことと深く関わっていることが分かる。

更に、ロゼッタとジャクソンという二人のゴスペルシンガーがアメリカの大衆文化に果たした役割の違いを明らかにし、二人の晩年の人生における落差を対比することで両者のゴスペルへの貢献を比較検討する。

近代日中両言語における新漢語の成立と受容の関係

文学研究科日本文化専攻 日本語研究専修 林 文 思

1 研究の基本姿勢と範囲

本論文は、近代以降の日中間の語彙交流の史実を研究の対象とする。「近代における日中間の語彙交流の史実」とは、両言語間に見られる、語彙の流入、受容、定着——或いは淘汰、自国語の語彙体系の中に組み込まれたときに生じる語彙の変化という意味において解明していく。しかしその全体にわたる考察は、現在のところ不可能である。本研究は中国語の立場に立ち、近代以降、中国語に入ってきた日本語の語彙に焦点をあて、その流入の時期、経路、受容の方法、定着（或いは淘汰）のプロセス、語彙の変化及び、その外来語としての特異性について考察を試み、個別事例から一般性のある法則に近付こうとするものである。中国語への日本語の語彙の流入は、西洋文化、文明の東漸という中国社会の近代発展の過程において、訳語・術語の確立を中心に、自然科学、人文科学にわたって研究するものである。本研究で考察や調査となる対象の語彙は、化学・医学・物理学などのような高度な術語・専門用語ではなく、今日における普通の知的社会生活を営むのに必要な語に限る。また、本論文の中では、第三章のように、主に近代前後期における「関係」という語の出現、出典、受容についての経緯を中心として考察していく。

2 いわゆる「近代」という時期について

日中両言語間の語彙の交流は、漢字の伝来から考えれば、千年以上の歴史をもっている。しかし、明治維新までは、主に、中国から日本へ一方的な流入であって、中国語への日本語の語彙の逆流入（この学界で用いられる用語で、このような現象は有標的な [MARKED] 状態として把握されているのである）が一つの社会的言語現象として現れたのは、19世紀末から20世紀初にかけての僅かな一時期であった。ここでまず、両国における近代の時期を示す。日本では、「近代」という語は普通、明治維新（1868）から第二次世界大戦終戦（1945）までの時期を指し、終戦以降は現代と呼ばれているが、それに対し、中国では、イギリスとのアヘン戦争（1840）を近代史の始まりとし、20世紀10年代の辛亥革命（1911）、五四運動（1919）以降は現代であると考えられている。

このようなずれに対して、近代における日中語彙交流の史実の研究を目指す本論文は、近代史学の時代区分に

こだわらず、次に述べるような事情により、とりあえず「近代」という期間をアヘン戦争の1840年から第二次世界大戦終戦の1945年までの間とし、さらに日清戦争敗戦までの期間（1840-1895）を近代前期と、その後の期間（1895-1919）を近代後期と設定しておく。この間に生じた両言語間の語彙の借用事実を中心に考察を進めた。一般に日本語の語彙の大量の流入期は、1895-1919の間（近代後期）とされている。しかし、1919年以降、人の交流（留学生）と翻訳書の数こそ下降線をたどり始めたが、日本語の借用は辞書、用語集などの編纂を通じて、引き続き行われた。別の観点からすれば、1919-1945の間（及びその以後）において、日本語の借用は個々の語の伝来を中心とするのではなく、既に流入してきた語を咀嚼、消化し、それらを定着（或いは淘汰）させる形を採っていたとも言える。また戦時中は、いわゆる昭和の時事語が少量ではあるが、入ってきた事実がある。日本語の借用の終焉は、第二次世界大戦の終戦——その時点から始まった両国の断絶時代と共に到来したと考えられる。

一般に、語彙交流の研究については、次の二つの研究が必要となる。

一、言語の借用を起こした社会的、文化的背景についての研究

二、語彙交流が発生した当時の各言語の共時的状況についての研究

本論文の近代における日中間の語彙交流を実現させた社会的、文化的背景についての把握は、近代中国において盛んに展開されつつある近代史、とりわけ、西洋文明東漸史、近代日中関係史などの研究成果に負うところが大きい。

一方、語彙交流の双方、つまり日本語と中国語のそれぞれの近代における共時的状況も、本論文の研究の基盤である。中国語に関しては、中世、近世の語彙の研究はともかくとして、近代の語彙についての研究が、まだ本格的に着手されておらず、直接利用できるものは少ないのが現状である。それに対して、日本ではここ数年、近世、近代漢語、訳語の研究が盛んに行われ、大きな成果が挙げられている。本論文はこれらの研究成果を最大限に視野に収め、考察を進めた。

台湾の日本語教育における形容詞・形容動詞指導の研究

文学研究科日本文化専攻 日本語研究(Ⅰ)専修 潘 婉 華

近年、台湾では日本との交流が頻繁になり、台湾の教育界では、日本語教育に関心が高まってきており、英語より日本語教育が注目されるようになってきている。台湾の日本語学習者は年々急増し、年齢も幅広い。そのような状況となった背景には歴史・地理・文化的な要因が挙げられる。特に最近、日本のアニメや歌、ドラマ、人気アイドルなどの大衆文化が大量に輸入され、台湾の生活にひろく浸透していった結果もある。外国語を学ぶときに、母語の影響を強く受けることにより陥ってしまうさまざまな問題点が当然ある。本論文では、台湾の大学生の日本語学習者を対象とする実態調査を行い、特に日本語の形容詞・形容動詞についての使用実態及び形容詞・形容動詞の学習意識にポイントを置きながら、中国語を母語とする学習者が日本語を学習する上で陥ってしまう問題点を明らかにしていくことを目的とした。では、本論文における、研究方法や調査結果について簡潔に述べていきたい。

第1章 この章においては日本語の形容詞及び形容動詞の定義から、日本語教育で指導される形容詞・形容動詞の活用形について考察し、「ない」によって助動詞になるのか、形容詞になるのかを区別、形容詞・形容動詞を中心とする基本文型、連用修飾及び連体修飾の使い方なども考察した。さらに、時代の流れとともに生まれる新語あるいは新用法の形容詞・形容動詞はどうなるのかについても触れた。最後に、形容詞・形容動詞から変化した複合語及び派生語の基本認識についても論述した。

第2章 この章では台湾の日本語教育は歴史的な背景の影響を受け、日本語教育環境も大きく変化してきた。台湾における日本語教育の指導状況と、教科書の使用上、どのような現状にあるかを把握する。また、形容詞・形容動詞を指導する上で、どのように指導しているのか、どのような教科書を使っているのか、またその文型の利用が適当であるかという視点から、考察した。

第3章 形容詞を用いた日本語表現で台湾では中国語文法の影響から「おいしいの茶」などの不自然な表現がよく見られる。このように、外国人の学習者にとって間違いやすい現代日本語の形容詞・形容動詞について、日本語学科の大学生を対象とした実態調査を行った。本調査は1)台湾における日本語学習者の習得状況を明らかにすること、2)学習者の、単語、文法、会話の使い

方にどのような問題点が存在するのかを明らかにすること、3)第二言語としての学習者たちに形容詞・形容動詞の習得がどの程度必要かを明らかにすること、を目的とし、台湾の三つの大学の学生を対象としたアンケート調査をおこなった。

今回のアンケート調査の結果、学生たちは、形容詞・形容動詞の①機械的学習、②名詞修飾、③文体テンス、④接続表現、に問題が多いことが分かった。例えば例文を翻訳すると、「雪が降ると、あたりの高い山が白いなる」などの錯誤例が現れた。その調査結果により、形容詞・形容動詞の誤用実態について分析した。

第4章 この章では現代日本語教育に関する形容詞・形容動詞を中心として、よく使われる語彙を調査した。言語学習者にとって、語の意味を理解するために一番使いやすい辞書を目標として、使用率及び誤用率が高い形容詞・形容動詞を選抜し、新たな一覧表を試作した。今回、形容詞・形容動詞の使用頻度を調査した結果、使用率が高かった形容詞・形容動詞を初級学習者に指導すべきこと、また学習者にその高頻度の形容詞・形容動詞の一覧表を教えるとき、基礎として指導すれば、形容詞・形容動詞の指導及び学習を、多少改善することができるのではないかと考えた。

今回の調査と研究により、日本語教科書の分析や、アンケート調査をもとにして外国人が間違いやすい点を浮き彫りにしてゆく考察をおこない、また指導上の注意点も指摘して、より良い日本語教育法を見つけていくことを目標に研究を行った。これによって、台湾の日本語学習者の問題点は何か、これからどの問題点に対応する指導法などが必要かを提示した。日本語の形容詞・形容動詞の学習及び指導についての問題点を解決し、さまざまな問題点を乗り越え、誤用を少なくすることは今後継続する課題である。台湾の日本語学習者にとって、形容詞・形容動詞の正確な理解は今後の日本語教育に欠くことのできない視点だと考える。本論文は、問題点を整理するとともに、指導上の注意点も指摘したがそれらの注意点及び困難点について、どのように指導すればよいのかは、今後の日本語教育の中で実現することが多いため、今後の課題である。さらに学習者に効果的で明解な教科書あるいは学習書を作ることも課題にしたいと考えている。